

済生学舎に医術を学ぶ。

○明治三十年十月、東京に於ける内務省医術開業後期試験に合格す……。

右のように野口は履歷書に記している。

当時野口と同級生であった岡山県高梁町出身の「原玄一郎」の遺品が、孫の関西医科大学公衆衛生学教授原一郎先生の手により大学に寄贈された。その品は「顕微鏡科実地演習」で作られた病理学・細菌学のプレパラート八十六枚を収納した「標本箱」である。

その中に、ペスト菌の標本が十枚含まれていた。筆者は大学の南正康公衆衛生学教授のご指導を得て、顕微鏡写真を撮影した。

ペスト菌は、二箇の核を含む両端が半円形の小桿菌で、一箇又は二箇、時には数箇連なつて、現在も鮮明に確認された。ペスト菌は、北里柴三郎とバストール研究所のエルザンにより、香港でペスト流行時の明治三十七年に最初に（ペスト菌が）発見された。以来二年後の明治二十九年三月三十日に、横浜港に入港した米国郵船「ゲリーック号」の乗組員李亨（十七歳）が上陸して、ペストを発病し、屍体より、伝染病研究所の高木友枝が菌を確認している。

同年（明治二十九年）の十二月に、済生学舎では別のペスト患者を用いて「顕微鏡科実地演習」を三ヶ月行い、ペスト菌の標本を学生に作らせている。原玄一郎の標本箱の扉に「明治二十九年東京に於いて、原玄一郎製」と筆で大きく記入し

ている。当時の細菌学の講師は、東京帝国大学医科大学衛生学助教授の坪井次郎であった。衛生学講師は横手千代之助医学士であった。二人によりペスト患者が済生学舎の顕微鏡科実習用を持ちこまれたと推察する。かくして、野口は、坪井次郎に講述されたと思える「細菌学手記」を残している（ドイツ留学中に、ペツテニコッフエル及びコッホから学んだ細菌学が講述された）。

（四）順天堂時代から伝染病研究所時代

野口は医術開業試験に合格すると、血脇守之助の口添えて順天堂に勤務した。そこには菅野徹三という済生学舎出身の学者がいて、論文の書き方、図書館の利用法を教授した。野口は更に、明治三十一年十月より、伝染病研究所に入り、本格的に細菌学を身につけた。やはり済生学舎出身の浅川範彦第三部長の指導による。かくして横浜海港検疫所にてアメリカ丸より、ペスト患者の菌を検出した。

（平成十六年三月例会）

日本における病院歯科の軌跡

柳原悠紀田郎

歯科医療も基本的には医療の中に含まれるわけであるが、実際には歯科医療は幾つかの特異な性格があるので、医療とは別個に取り扱われている。こういうことを病院歯科の軌跡

という視点で追ってみた。

まずわが国の病院のルーツとしては六世紀ころの仏教流入に関わって難波に設立された傷病者の収容施設である悲田院、施薬院などを挙げる事が出来ると思うが、これはそれより少し遅れてヨーロッパでキリスト教やイスラム教の教会に付属して設置された養生所などとほぼ同源のものと考えられる。これらはいずれも貧窮者の救済施設であつて、当時は日本でも西洋でも支配階級の人たちは勿論、一般の市民は傷病の療養は自宅で行うのが通例であつた。

こういう救療施設ではない病院の形態がヨーロッパでいつごろから始まつたかは明らかでないが、日本では文久元年(一八六一)、オランダ人の医療を受けたという日本人のために有料のベッドを始めたボンペの長崎養生所や、その翌年に横浜で米人シモンズによつて開設された横浜病院あたりが始まりではないかと思われる。実際に日本ではこれに引き続いて明治初年ころから、各地で病院の設立が盛んに進められている。

しかしこの時期、歯科医療の方は、宮廷、幕府、大名などの典医の形の抜歯や義歯調製には手を付けない口中医がいたが、一般の市民は市井で開業していた歯医者と呼ばれていたものが歯科医療を行っていた。さらに庶民には入歯師、歯抜師とよばれていたものやさらに香具師の仲間の歯抜渡世人、入歯渡世人などまでが関わっていた。

こんな状態の中で明治になつてから横浜にやってきた米國

人歯科医師の所で所謂西洋歯科医師を身につける者がでてきて、明治八年(一八七五年)の初めての医術試業試験に小幡英之助が受験して歯科医師の免許を受けて歯科医師が発足することになったが、これは古くヨーロッパの *Detaloré*、*Toothtrewer* から *Surgeon Dentist* へのコースと同じ道を辿つた訳である。

こんな状態だからそのころ盛んに設立されていた病院には歯科は全く関係がなかったが、明治十年に大阪に緒方病院が出来た時、ここに歯科部が置かれ、蘭方医で歯科医の免許をとつたばかりの佐治職が担当している。その二年後の明治十二年には仙台の宮城県病院が設立された時、ここにも歯科部が置かれ歯科医の高田直友が就任しているが、これらの実態的な診療内容などは明らかではないし、その後しばらくは病院歯科の記録は見られていない。

改めて歯科医術開業試験が発足したのは明治十六年のことであるが、その翌年開設された山口の県立病院には歯科部が置かれ、富永省吾が就任し、またその翌年の明治十八年には三重県病院の歯科に直村善五郎が就任している。このころには歯科医術の内容が次第に充実していたので、所謂西洋歯科医術が行われていたものと思われる。

本格的な病院歯科の形態は明治三十六年十一月に東京大学医科大学付属病院歯科の外來が発足した時であるが、「歯科医は医師に非ず」という明治医会の考えの流れでここでは医局員は総て医師で歯科医は介補という身分で診療に当たつてい

た。
大正に入つて千葉・京都府立・愛知等の医科大学病院に歯科がおかれるが、これらにはすべて東大医学部からの医師が就任している。

明治三十九年の歯科医師法によつて発足した二つの歯科医学専門学校の卒業生が参入してきたのは大正元年のことであるが、大正九年に慶應義塾大学医学部が発足した時、その歯科の主任教授として東京歯科医学専門学校の第一回卒業生の岡田満が就任し、これをきつかけとして、鹿児島県立病院、横浜十全病院、聖路加国際病院などの歯科には歯科医師が就任している。

こうして現在に続くことになったわけである。

(平成十五年十一月例会)

相州小田原藩医・市川氏と市河氏

中西淳朗

相州小田原藩の医史については二〇〇二年の六月例会において、蘭方藩医の市川蘭好とその兄隆甫を中心にしてその一部を報告した(日本医史学雑誌第四八巻第四号六六九〜六七〇頁に収載)。今回は前回にのべることが出来なかつた疑問点について報告した。

その一、寛政十年(一七九九)の「蘭学者相撲見立番附」に、西三段目の五枚目に隆甫がのつた理由は何かという問題。昨年四月発行の「啓迪」二十一号に、京都の奥沢康正先生が論文「日本で翻訳された眼科洋書・刊本、写本類から」を発表された。この中にJ・J・プレントクの *Doctoria de morbis oculorum*、Vienna の蘭語版が舶来し、杉田立卿によつて『和蘭眼科新書』と訳され出版されるまでの経過が詳しく図示された。

それによれば市川隆甫が上の蘭語本を購入し且つ宇田川玄随に和訳を依頼。玄随は蘭語写本を四冊作り杉田玄白、大槻玄沢、大森寿安に贈呈したことにより当時の眼科診療が大いに前進した。隆甫の公開行為が高く評価されて番附にのつたと考えられる。ただしこの年の芝蘭堂の新元会に出席したかは不明である。

というのも、その頃に隆甫は小田原に帰り、奥医師となり医学肝煎になったからである。藩医の欠員が生じたための帰国と考えられる。

その二、医学肝煎としての市川隆甫は何をしたかという問題。日常的な藩医としての仕事の外に、高田稔氏の研究によれば、寛政八年に小田原に再入部した大久保加賀守忠貞に、蘭学とは何かを隆甫は講じたという。忠貞の手沢本の中に、みずから写した前野良沢訳「和蘭築城書」寛政二年本三巻一冊、蘭人ケイゼル著・今村英生訳「和蘭馬術書」、また「西洋諸蛮戦争之後紅毛復古稍盛大之話」などがあり、さらに文化